居る、そうして其の分岐の時代についても、古い文獻が現はれるに從がつて、比較的後世のことであらうとの見解を有力にせしめて居る。それで單語としても、かく古代から存在して、同一のことを行つて居つたと思はるゝ巫の名稱などは、彼等の間に一致したものがありはすまいかといふことは、誰しも考がへ及ぶことであらうと思ふ。此の考が成立するか否かは、北方民族の文化史上に於て興味ある問題といはねばならぬ。

三國語の中で巫の名稱の最も早く現はれて居るのはトルコ語であつて、唐書黠戛斯の傳に「呼ゝ巫爲甘」と見えて居る、甘の古音は kam なることはいふ迄もない。また蒙古史の著者ラシッド・ウドヂンがウィグルの書物を基にして書いたといふウィグルの史傳にも、其の國の初めての有力なる君主 Buku khan の時代に kam と稱する巫のあつたことが明記されてある。[19] Buku khan の時代は唐の時代に相當するものと考へられて居る。[20] ついでは十一世紀の半頃にウィグル語で書かれた Kudatku Bilik なる書物にも、諸所に巫に對して qam なる語は用ゐられてあるし、いつと判然時代は定めがたいが、高昌から發掘せられたマニ教典のウィグル語の譯本にも、[21] また屢々此の語は現はれて居る、勿論是は今日も廣くトルコ語の諸方言の間にも傳はつて居り Teleut, Altai, Lebed, Schor, Sagai, Koibal, Küarik, Sojot, Koman 語などではすべて qam といひ Katschinzi 語では qam 若くは Kamnoe, Kirghiz 語では Kamtscha, Beltire Tatar 語では kamen などゝ呼んで居る。[22] かくの如く唐代以前のことは知り難いけれども、その以後はトルコでは引き續き此等の語で巫を呼んで居るのである。

ツングース語では三朝北盟會編によると、金の「珊蠻者女眞語巫嫗也」と見えて居るが（金史補所引）近時の此の國語では saman[23] もしくは saman[24] といひ、滿洲語でも sama 若くは saman といふのだから、珊蠻は saman の對音に